

予報第2号(6月)

病虫害発生予報第2号

平成 20 年 5 月 30 日

大阪府病虫害防除所

農作物名	病虫害名	予想発生量
水稲	いもち病	□
	縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	□
	ニカメイガ	△
	ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)	□
	イネアオムシ(フタオビコヤガ)	□
ぶどう	べと病	□
	灰色かび病	□
	チャノキイロアザミウマ	□
みかん	黒点病	△～□
	そうか病	△
	ミカンハダニ	▲
	アブラムシ類	□～○
いちじく	アザミウマ類	△～□
もも	せん孔細菌病	□
果樹全般	カメムシ類	△
なす	灰色かび病	□
	すすかび病	□
	うどんこ病	△
	ミナミキイロアザミウマ	△～□
トマト	灰色かび病	□

	葉かび病	□
非結球あぶらな科葉菜類 (大阪しろな、こまつな等)	コナガ	△
きく	白さび病	□
	黒斑病・褐斑病	□
野菜・花き類	アブラムシ類	△～□
	ミカンキイロアザミウマ	△
	シロイチモジヨトウ	△～□
	ハモグリバエ類	□
	オオタバコガ	□
	コナジラミ類	○
▲:少ない △:やや少ない □:並 ○:やや多い ●:多い		

気象予報(大阪管区气象台 5 月 25 日発表)

	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温(確率)	20	40	40
降水量	30	30	40
日照時間	40	30	30

A 水稻

1 いもち病

予報内容 発生量 : 並

予報の根拠

- (1)5月は降水量少なく、いもち病が発生しにくい気象条件であった。
(2)6月は降水量やや多く、日照時間が短いと予想され、注意が必要。

防除上考慮すべき事項

- (1)育苗箱において発生した場合、その箱の苗は本田に移植しない。
(2)田植後の余り苗を水田に放置しない。
(3)発生が予想される場合は、田植前に箱施用剤を処理する。
(4)密植をしない。

(メモ)

低温、日照不足、降雨が多いと発病が多くなる。
近年、他府県において MBI-D 剤耐性菌の発生が報告されているので、本剤の使用は1作1回のみとする。

2 縞葉枯病(ヒメビウンカ)

予報内容 発生量 :並

予報の根拠

(1)5月に行ったヒメビウンカの縞葉枯病の保毒虫率検定では平年同様保毒虫は見られなかった。

(2)5月のヒメビウンカ発生はやや多かった。

防除上考慮すべき事項

(1)前年度発生が多かった地域あるいはその周辺地域では、田植前に箱施用剤を処理する。

(メモ)

ヒメビウンカは縞葉枯病を媒介する。

3 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量 :やや少ない

予報の根拠

(1)昨年度の予察ほ場での発生はやや少なかった。

(2)5月の予察灯への飛来は見られなかった。

防除上考慮すべき事項

(1)常発地では、田植前に箱施用剤を処理する。さらに発生が多いほ場では、移植後の防除を行う。

(2)手植田では、苗の活着後に粒剤を施用する。

4 ニカメイガ(第1世代幼虫)

予報内容 発生量 :やや少ない

予報の根拠

(1)昨年度の予察ほ場での発生は平年同様見られなかった。

(2)5月の予察灯への飛来は見られなかった。

防除上考慮すべき事項

(1)前年発生の多かった水田では、田植前にフィプロニル剤を含む箱施用剤を処理する。

(2)箱施用剤を処理しない場合は、7月上中旬に防除を行う。

5 ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)

予報内容 発生量 : 並

予報の根拠

(1) 昨年度のほ場での発生量は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)水深4cm 下の浅水管理とする。

(2)桃色の卵塊は水中へ掻き落とし、成貝は拾い取り、処分する。

(メモ)

田植後20日以内の苗が食害されるので、この時期の防除を徹底する。

6 イネアオムシ(フタオビコヤガ)

予報内容 発生量 : 並

予報の根拠

(1)昨年度の予察ほ場での発生はやや多かった。

(2)近年、府内中山間部を中心に局地的に多発している。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期の防除を徹底する。

(2)フィプロニル粒剤の効果は低いので注意する。

(メモ)

この虫の生育適温は25～27℃。

多肥栽培は発生を助長する。

B 果樹

1 ぶどう

べと病

予報内容 発生量: 並

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は平年と同様に見られなかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発病を認めたら、被害葉は速やかに取り除くとともに、初期防除を徹底する。

(メモ)

べと病は、降雨が続く、気温が低めに経過すると急に広がりやすい。

2 ぶどう

灰色かび病

予報内容 発生量:並

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は平年と同様に見られなかった。

(メモ)

ハウス栽培では換気を行い湿度を下げる。

3 ぶどう

チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量:やや少ない。

予報の根拠

(1)5月の黄色粘着トラップによる誘殺虫数はやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期の防除を徹底する。

4 みかん

黒点病

予報内容 発生量:やや少ない～並

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は平年と同様に見られなかった。

(2)昨年度、予察ほ場での発生は、平年よりもやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)今後の降水量が多いと多発するので、防除を徹底する。

(メモ)

この病気は、枯枝上から雨滴によって広がっていく。

5 みかん

そうか病

予報内容 発生量:やや少ない

予報の根拠

(1)5月の巡回調査では、発生は少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)果実での発病を抑えるため、発生の多いほ場では、梅雨前の防除を徹底する。

(メモ)

降水量が多いと発生が多くなる。

風通しの悪い密植園で多発しやすい。

6 みかん

ミカンハダニ

予報内容 発生量: 少ない

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期の防除を徹底する。

(2)同一薬剤や交差抵抗性のある薬剤の連用を避ける。

(メモ)

・ハダニ類は雨が少ないと多発しやすい。

7 みかん

アブラムシ類

予報内容 発生量: 並～やや多い

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、全体的には平年並であったが、一部で多発していた。

防除上考慮すべき事項

(1)発生が多い場合は、直ちに防除を行う。

(2)薬剤抵抗性が発達している場合があるので、同一薬剤の連用を避ける。

8 いちじく

アザミウマ類

予報内容 発生量: やや少ない

予報の根拠

(1)5月の粘着トラップによる誘殺虫数は、やや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)1～3番果の果実の果頂部の目が開きだした時(6月中旬)が、1回目の防除適期である。

(メモ)

アザミウマ類は雨が少ないと多発しやすい。

9 もも

せん孔細菌病

予報内容 発生量:並

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、平年並みの発生量であった。

(2)昨年度、予察ほ場での発生は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)果実での発病を抑えるため、初期防除を徹底する。

(メモ)

雨と強風が発生を助長する。

10 果樹全般

果樹カメムシ類

予報内容 発生量:やや少ない～並

予報の根拠

(1)5月のフェロモントラップへの誘殺虫数は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)果樹カメムシ類は園によって飛来状況が大きく異なるので、園を注意深く見回り、発生を認めたら防除を行う。

(2)薬剤は果樹カメムシ類の活動が活発な夕方もしくは早朝に散布する。

C 野菜類

1 灰色かび病

予報内容 発生量 :並

寄主作物:なす、トマト

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)多湿条件下で発生が多くなるので施設の換気を十分行うとともに、茎葉が過繁茂にならないよう整枝を工夫する。

(2)果実に付着した花卉からの感染が多いので花卉の除去に努める。

(3)同一薬剤の連用を避け、薬剤のローテーション散布を行う。

(メモ)

灰色かび病は、低温多湿条件下で発生が多くなる。

2 すすかび病

予報内容 発生量 :並

寄主作物:なす

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)ストロビルリン系薬剤(アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル)に対する感受性が低下している。

(2)病葉は早めに摘除し、ハウス外に持ち出し処分する。

(3)初期防除が重要となるので、発病を認めた場合には、葉の裏にもかかるようにていねいに薬剤散布を行う。

(4)同一薬剤の連用を避け、薬剤のローテーション散布を行う。

(メモ)

すすかび病は多湿条件下や樹勢が低下したときに発生が多くなる。

3 うどんこ病

予報内容 発生量 :やや少ない

寄主作物:なす

予報の根拠

(1)5月下旬のなすの巡回調査では、発生はやや少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)こまめに摘葉、摘芯を行い、過繁茂にならないようにする。

(2)発生初期の防除を徹底する。

(3)樹勢が弱ると多発しやすいので、肥切れにならないように管理する。

(メモ)

うどんこ病は、日照不足、乾燥条件下で多発する。

4 葉かび病

予報内容 発生量 :並

寄主作物:トマト

予報の根拠

(1)ハウストマトの5月下旬の巡回調査では、平年並であった

防除上考慮すべき事項

(1)施設栽培においては換気に努め、マルチを行う等、湿度を低く保つ。

(2)下～中位葉に発生しやすいので、発病を認めたら早めに摘葉し、病葉はハウス外に持ち出し処分する。

(3)初期防除が重要となるので、発病を認めた場合には直ちに防除を行

う。

(4)同一薬剤の連用を避け、薬剤のローテーション散布を行う。

5 ミナミキイロアザミウマ

予報内容 発生量 :やや少ない～並

寄主作物:なす

予報の根拠

(1)5月下旬のハウスなす巡回調査では発生は平年に比べやや少なく、露地なすでの発生は平年並であった。

(2)近年、再び増加傾向にある。

防除上考慮すべき事項

(1)果実や葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。

6 コナガ

予報内容 発生量 :やや少ない

寄主作物:非結球あぶらな科葉菜類(大阪しろな、こまつな等)

予報の根拠

(1)5月のフェロモントラップへの誘殺虫数は少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期に防除を行う。

D 花き

1 白さび病

予報内容 発生量 :並

寄主作物:きく

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は平年と同様に見られなかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発病した下葉は早めに取り除いて処分する。

(2)発病を認めた場合には葉の裏にもかかるように薬剤散布を行う。

(3)同一薬剤の連用を避け、薬剤のローテーション散布を行う。

2 黒斑病・褐斑病

予報内容 発生量 :並

寄主作物:きく

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は平年と同様に見られなかった。

防除上考慮すべき事項

(1)発病した下葉は早めに取り除いて処分する。

E 野菜・花き類

1 アブラムシ類

予報内容 発生量 :やや少ない～並

寄主作物:野菜類、花き類

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生はやや少なかった。

(2)黄色水盤での5月の誘殺虫数はやや少なかった。

(3)局所的に発生しているほ場も認められた。

防除上考慮すべき事項

(1)少発生時の防除を徹底する。

(2)同一薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

(メモ)

アブラムシ類は多種類のウイルス病を媒介する。

2 ミカンキイロアザミウマ

予報内容 発生量 :やや少ない

寄主作物:野菜類、花き類

予報の根拠

(1)5月下旬の露地水なすの巡回調査では、発生は少なかった。

防除上考慮すべき事項

(1)収穫後の残さは、他作物等への発生源となるので、速やかにほ場から持ち出し処分する。

(2)きくでは膜割れ(蕾から着色した花卉が見える前)前後の防除を徹底する。

(メモ)

ミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマなどは、作物を加害するだけでなくウイルス病(TSWV)を媒介する。

3 シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量 :やや少ない～並

寄主作物:野菜類、花き類

予報の根拠

(1)フェロモントラップでの5月下旬の誘殺虫数は、やや少ないまたは平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期(若齢幼虫期)の防除を徹底する。

(2)黄色蛍光灯を終夜点灯すれば、成虫の行動や産卵を抑制し、被害を軽減できる。

4 ハモグリバエ類

予報内容 発生量 :並

寄主作物:野菜類、花き類

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、発生は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)被害葉、残さはほ場から持ち出し処分する。

(2)しゅんぎくや大阪しろな等の軟弱野菜では、収穫後に地表面をビニール被覆し、太陽熱により土中の蛹を殺すことで、次作の被害を軽減できる(4～10月の間可能)。

5 オオタバコガ

予報内容 発生量 :並

寄主作物:野菜類、花き類

予報の根拠

(1)5月下旬の巡回調査では、平年と同様発生は見られなかった。

(2)フェロモントラップでの5月の誘殺虫数は平年並であった。

防除上考慮すべき事項

(1)被害のあった果実や新芽は早急に処分し、周辺の幼虫を探して捕殺する。

(2)施設では、開口部を寒冷紗等(5mm 目合以下)で被覆し、成虫の侵入を防止する。

6 コナジラミ類

予報内容 発生量 :やや多い

寄主作物:野菜類、花き類

予報の根拠

(1)ハウスなすの5月下旬の巡回調査では、発生はやや多かった。

(2)ハウストマトの黄色粘着トラップの捕虫数はやや多かった。

防除上考慮すべき事項

(1)発生初期の防除に努める。

(2)被害葉や残さは、ほ場より持ち出し、穴を掘って埋めるなどして処分する。

(3)施設では、開口部を寒冷しゃで被覆し、成虫の侵入を阻止する。

(5)同一薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

(6)ほ場周辺の除草にも努める。

(メモ)

タバココナジラミは作物を加害するだけでなくウイルス病(TYLCV)を媒介する。

注1:防除薬剤等詳しいことについては、大阪府農作物病虫害防除指針を参照。

注2:ローテーション散布とは、害虫の薬剤抵抗性、病原菌の薬剤耐性の発達を

防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤(例えば、有機

リン系と合成ピレスロイド系など)を輪番に散布することである。

注3:薬剤の散布にあたっては、収穫前の制限使用日数、使用回数について特に

注意する。

農作物の病虫害に関する情報は

●病虫害発生情報メールサービス

申込先 大阪府病虫害防除所メールサービス担当

TEL 072-958-6551(内線232)

<情報料無料>

年間約40件の病虫害情報を電子メールで送付します。

●おおさかアグリメール

申込先 大阪府環境農林水産総合研究所(本部)

企画調整部技術普及課

おおさかアグリメール受付担当

TEL 06-6972-7666

最新の農業情報をあなたの携帯電話にお届けします。

(受信に要する通信費は自己負担です。)

●Web版大阪府園芸植物病虫害図鑑

「ひと目でわかる花と野菜の病虫害」

<http://www.epcc.pref.osaka.jp/afr/zukan/index.html>

(社団法人大阪府植物防疫協会)